読みやすい科研費申請書づくりを目指したい

私にもできた！科研費申請

立松大祐

本日の内容
1. リテラチャー・サークル研究で3回の申請
2. 3回目の申請ポイント
3. 図・表で研究したい内容を視覚的に表す

リテラチャー・サークルとは英文を読んでグループで話し合う言語活動です。

リテラチャー・サークル指導の普及を目指して、粘り強く申請をしています

- （2017年4月-2020年3月）
  リテラチャー・サークルを取り入れたアクティブ・ラーニング型授業の研究

  リテラチャー・サークルとは

- （2020年4月-2023年3月、2024年3月まで延長）
  リテラチャー・サークルの話し合い活動における英語使用の実態調査と指導法の研究

  指導法の確立
  生徒は何を話しているか

- （2023年4月-2026年3月）
  ICT環境を活用した**リテラチャー・サークル**実践の高度化と組織化

  実践者の広がり
  指導法、活動の高度化
  ICTでつながる

私にも申請できた

ポイント

- 3回の申請とも複数の先生に研究分担者をお願いし、申請書にアドバイスをいただいています。ブラッシュアップに感謝し、アドバイスを素直な心で受け止めています。

  1回目（池野先生、学外の先生）
  2回目（池野先生、学外の先生）
  3回目（池野先生、玉井先生）
  教科の領域を越えて、教育DX、STEAM教育に取り組むため

- 図や表で申請の要点を把握できるように試みました。

- 科研費セミナーに出席し、先生方からアイデアをいただいています。

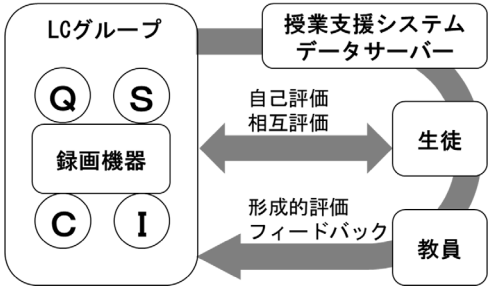
リテラチャー・サークル研究で3回目の申請にあたり

(1)本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」
背景として次の3点を挙げた

- **学習指導要領改訂のポイント**
  中学校は対話的な言語活動のより一層の充実、
  高等学校では統合的言語活動の一層の充実と発信力育成の強化
- **令和3年度の「英語教育実施状況調査」結果概要**
  中学生は、高校生ともに目標に達していない。
  英語力向上には「言語活動時間」や「ICTの活用」などが影響する。
  ICTを活用して遠隔地の生徒等と英語で交流する活動の割合は著しく低い。
  言語活動の充実とICTの活用が授業改善のポイントであり積極的な改善が望まれる。
- **「18歳意識調査」（日本財団，2019年）の国際比較**
  「社会問題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している」は、日本は9か国中で最下位。

小・中から対話の機会を増やし、生徒に社会を創る当事者意識を涵養すべきことが示唆される。英語の授業では、英文を読み身近なことや社会的な話題について、生徒同士で問いをつくり、積極的に対話する言語活動が必要であると考えられる。

図１ ICTを活用したLC実践



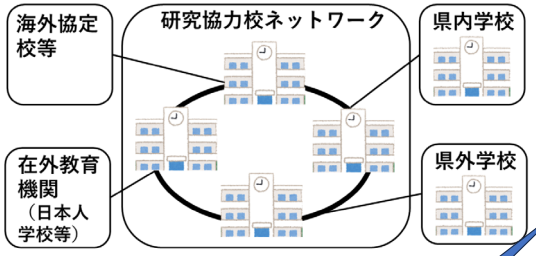
2019年度の申請書に使った図をベースに若干の修正を加えています。

(1) 本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

申請者らは、リテラチャー・サークル（LC）の実践研究を行っている（立松，2020など）。LCとは、学習者がグループになり読んでいる英文について質疑応答したり議論したりする**アクティブ・ラーニング型の言語活動**である。これまで研究協力校との研究により、LC活動の指導手順と授業モデルを提案した（立松・河野，2020）。図１のようにグループの読みの役割をQuestioner (Q)、Connector (C)、Summarizer (S)、Illustrator (I) にし、ICTを活用した実践を行っている。生徒は話合いを録画し授業支援システムのサーバーに保存する。その後、生徒はデータにアクセスし話合いについて自己評価や相互評価行い、教員は形成的評価とフィードバックを行うことができる。

これまでの取組

図２ 協働で学び合う探究のイメージ



協働で学び合う探究のイメージは、Society 5.0とGIGAスクール構想によるICTの整備と教育DXの考え方から、生徒の学びの機会と学びの方法・内容をより豊かにできると考えた。

(2)本研究の目的および学術的独自性と創造性

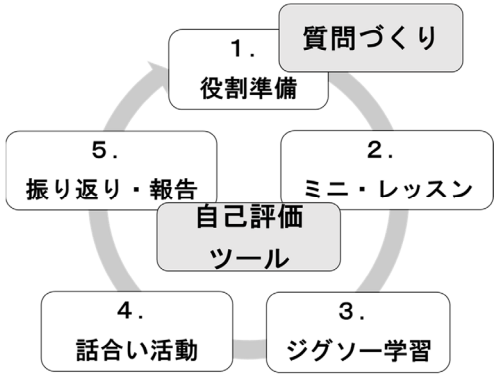
2）ICTを活用したLC実践の拡大－ICTを活用し学校間で取り組むLC実践、海外の学校と共同で取り組むLC実践を創造する。

同学年の別クラスや県内外、海外の学校とオンラインで結び、LCによる話合い活動を行い、教育DXの視点から学習者の対話機会を増大させ多様な対話機会を創出する。これにより、遠隔地などの小規模校の生徒も他地域の同年代の生徒とLCに取り組み、トピックについての互いの考えや意見を交換することができる。実施希望クラスや学校の募集とマッチングは「リテラチャー・サークル研究会HP（http://lcrc.ed.ehime-u.ac.jp）」を活用する。

ポイント

ICT活用で期待できること
山村、離島、へき地など小規模校の子どもたちに多様な意見に出会わせる。

図３ LCの指導手順



2019年度の申請書に使った図をベースに、実践研究を踏まえて情報を追加し、**新指導モデル**としています。

(3)本研究の着想に至った経緯や、関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

「生徒による質問づくり」はLC実践を重ねている研究協力者との省察から、深い話合いの実現には生徒と教材の心理的距離を近づけ、題材を自分ごととして考えさせることが有効と確認され、図3「1.役割準備」段階の際に全員が行う。他教科では児童生徒による質問づくりの実践報告はあるが、英語の指導にも積極的に取り入れたい活動である（立松，2022）。また、**「対話のための自己評価ツール」**の使用は、「2.ミニ・レッスン」「5.振り返り・報告」段階での活用を想定している。活動を通して生徒に身に付けさせたい会話スキルや対話での思考・判断・表現の方法が具体的に理解でき、指導者と生徒にとって英文の読み方や対話での表現方法の学びになるツールとして開発中である（2022年8月全国英語教育学会ワークショップでロ頭発表）。

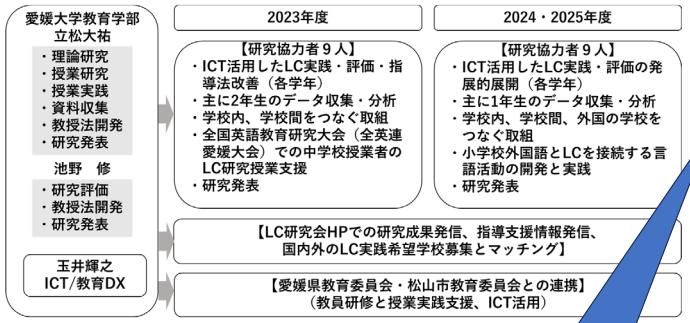
これまでの実践研究を踏まえた新たな取組

【関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ】

アメリカやオーストラリアでは学習者の読解・言語能力育成のため LC 実践が行われている（Wilkinson et al., 2020; Simpson & Ryan, 2018）。日本ではLC実践研究例は極めて少ないが、**愛媛県内での実践は増加しており、組織的実践研究を計画している**。英語使用調査や対話の談話分析、教育DXと指導法開発の研究は、対話力教育の実践研究を行う研究者と教員に有益であり、当研究分野の発展が期待できる。

地域での取組実績を強調し、実現可能な研究かもとアピール

図４ 研究体制と研究計画



ICT活用、小中連携の可能性

(4)本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

図4のとおり、**LCネットワークを構築し、LCでの英語使用と対話内容分析、指導法の改善と精緻化、ICTを活用したLC実践の国内外での拡大、LCにつながる小学校外国語の言語活動の開発**を行う。文献・事例研究と実践成果、使用教材などの指導資料は「リテラチャー・サークル研究会HP」で公開する。研究成果は全国英語教育学会（2023香川、2024九州、2025関東）、英語授業研究学会（2023東京、2024大阪、2025東京）などで発表し、論文化する。

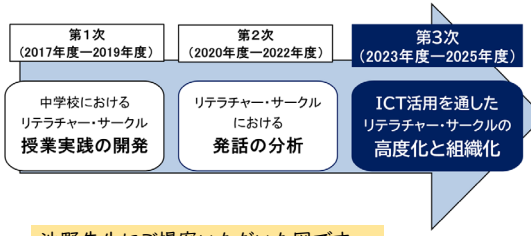
本研究の目的を達成するための準備状況

(5)本研究の目的を達成するための準備状況

授業支援システムと1人1台端末等のICT機器整備が進み、話合い活動の録画、学校内外の交流ができる環境となった。研究協力者は9人体制になり、コロナ禍での話合い活動の工夫も進んだことから、LCを継続的に実施・観察できる環境と学校間での実践交流環境は整っている。愛媛県内では今年度中にオンラインでのLC交流授業を試験的に始める予定である。また、2023年度全国英語教育研究大会（愛媛大会）で中学校の授業者はLCを実践するため、研究協力者との勉強会を始めている。Alyson Simpson博士（シドニー大学）は本研究の助言者であり、シドニー市内のLC実践教員と交流希望学校について助言を受ける。また、愛媛大学教育学部附属学校はオーストラリアの小中学校との交流協定を続けており、LCの交流も計画している。協定校と研究協力校以外のLC希望校の募集とマッチングには「リテラチャー・サークル研究会HP」を活用する。

3回目の申請だからこそ、これまでの成果の積み上げと、申請内容の研究を始めていることをアピールしました。

図５ これまでのLC研究と今回の研究の関係



池野先生にご提案いただいた図です。
第1次から第3次までの研究キーワードですっきりと整理されています。

前回の助成による成果

教員研修、学会発表を通してリテラチャー・サークルの普及に努力している。

2 応募者の研究遂行能力及び研究環境
（1）これまでの研究活動

【研究代表者】代表者は、協同学習、第二言語習得研究など関連分野の理論的背景からLCを導入する有効性をまとめ（立松，2016a）、大学生対象のLC実践研究を報告した（立松，2016b）。また、アメリカの小学校から大学でのLC事例調査（立松，2017b，2018）を踏まえた研究協力校との共同研究を報告した（立松他，2017a）。LCの指導手順とモデル授業の開発を行った立松・河野（2020）では、グループの読みの役割をQuestioner、Connector、Summarizer、Illustratorに絞り、ICT授業支援システムを活用した実践を報告した。立松（2020，2021，印刷中）は、複数回のLCの対話を7つの観点から分析し**中学3年生の英語使用指標を提案し、談話分析から生徒はLCの対話により深い学びを実現していることを報告**した。また、立松（2022）は対話の質を深めるため、生徒自身による質問づくりを取り入れることを提案した。代表者は**愛媛県教育委員会**（2018年度から現在）や**松山市教育委員会**（2021年度から現在）の**教員研修にてLCセミナー**を続けている。2022年8月には**全国英語教育学会北海道研究大会**にて「読むことと話すことの統合」の**ワークショップにてLC指導の講師**を担当した。これらの業績は本研究の目的達成につながる。

私にも申請できた

- ブラッシュアップをお願いすることが大切です。
- フォントの変更、太字や下線などを使い、見た目に変化があるようにしました。
- 図や表は単純で理解しやすいものを心がけました。
- 申請時までの成果と課題を踏まえた発展的研究であることをアピールしました。
- 英語教育とは関係なさそうな調査結果をリテラシー教育の課題としてうまく活用することができた。
- アクティブ・ラーニング、ICT、Society 5.0、GIGAスクール構想、教育DX、STEAM教育、オンライン交流学習などの用語を使い、時代のニーズに合う研究内容に見てもらえるよう心がけました。
- 研究成果を口頭発表や論文化して実績を作ろうとしています。

次回はどうする？　助けてください

ご清聴ありがとうございました。